（第３種郵便物認可）　日本教育新聞

ＩＣＴを効果的に活用し「確かな学力」

パナソニック教育財団 特別研究指定校　宮崎・小林市立東方中学校

「確かな学力」の育成を目指し、各教科等でＩＣＴ活用に取り組む宮崎県小林市立東方中学校（外赤隆志校長、生徒50人）。本年度は（公財）パナソニック教育財団・特別研究指定校2年目を迎え、問題解決能力向上に向けて総合的な学習の時間に力を入れている。指導・助言を行う吉崎静夫・日本女子大学名誉教授のコメントと合わせて紹介する。

主体的・対話的で深い学び　各場面の目標設定

生徒会役員選挙の政見放送をタブレットＰＣで撮影（上）、それを給食時間にZoomに接続して視聴した（下）

「タブレットＰＣとデジタル教科書を使った関係図の作成（国語）」「グループで協力して英文のスキットづくり（英語）」「タブレットＰＣと電子黒板を使った解き方の解説（数学）」…。同校では効果的にＩＣＴを活用し、各教科等で多くの実践を積み重ねている。

「ペーパーレス職員会」や「Ｚｏｏｍを使った生徒会役員選挙政見放送」など、教師も生徒もタブレットＰＣ（教師用3台、生徒用33台）を学校生活の中で使用。小学校でもＩＣＴに慣れ親しんでいる生徒たちは、鉛筆や消しゴムと同じように学習用具の一つとして機器を使いこなしている。

実践の柱に置いているのは「確かな学力」の育成。本年度は新型コロナにより、社会や日常生活に大きな変化が見られた。予測できない状況に対し、これからを生きる生徒たちに必要なのは、自分を律して自立して生きる力。同校ではそれを「確かな学力」とし、「思考力・判断力・表現力」「情報活用能力」が合わさったものとして考えた。学校全体で共通理解を図り、授業づくりに取り組んでいる。

「確かな学力」は、新学習指導要領で授業改善のキーワード「主体的・対話的で深い学び」の学習過程の中で育てている。例えば、「主体的な学び」と「対話的な学び」に続く「深い学び」では、「自分のこれまでの考えと新たに学んだ考えをつなげること」を目標に置く。こうした学習で効果的にＩＣＴを活用。目的を設定したことで、研究主任の山口博英教諭は「各教科等で統一が図れ、なぜ対話場面を設定するのかなど、授業づくりのイメージがしやすくなった」と話す。

「総合」で問題解決能力育む

昨年度はＩＣＴ活用の実践を重ね、本年度は問題解決能力の育成に力を入れている。授業は各教科等で育んだ力を発揮できる総合的な学習の時間を中心に展開。小林市では「こすもす科」と呼ばれ、独自のカリキュラムを進めている。

本年度は新学習指導要領などが改訂された。中学校には3年間の学習単元として「小林市シリーズ（地域題材）」と「夢シリーズ（キャリア教育）」がある。指導展開例などを参考に、同校の実態に合わせて手を加えた。

まず1年生は市の問題を調べ、2年生は修学旅行に合わせて市の良さをＰＲ、3年生は1・2年の学習を基に、将来の市の姿を描く「小林市未来予想図」を作成。自らの考えなどを表現する手だてとしてＩＣＴを効果的に活用する。指導はその学年を担当する全教員が行う。分担して作業が行えるため、負担軽減にもつながっている。

「情報活用能力」はチェック表で把握

これまでの成果の一つに、「生徒一人一人の語彙（ごい）力が向上し表現の幅が広がった」と話す山口研究主任。自分の考えに理由を加え、プレゼンを行う時は相手を意識して分かりやすくシンプルなものを目指すように

吉崎静夫　日本女子大学名誉教授

主体的・対話的で深い学びとＩＣＴ活用の関係、明らかに

本校は21世紀の社会を見据え、「確かな学力」を「思考力・判断力・表現力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」の三つの柱で捉えている。そして本校で作成した「東方中・情報活用能力チェックリスト」を用いて、1～3年生までの「情報活用能力の実態と変容」を的確に把握し、その特徴を全職員で共有している。

さらに、本校の取り組みの特徴は「主体的・対話的で深い学びとＩＣＴ活用および情報活用能力の関係」を明らかにさせていることにある。例えば、3学年の総合的な学習の時間でタブレットＰＣを使い、前時に個人で見いだした地域（小林市）の問題点と良さを基に、発表ノートでカードを作成する。

この活動は、まさに「主体的な学び（これまでの自分とつなぐ）」である。そしてタブレットＰＣの画面合体機能を使い、一つの大きな画面を作り、ＫＪ法を用いて、グループのそれぞれが見いだした問題点と良さを話し合う。これは、まさに「対話的な学び（人とつなぐ）」である。

このような教育実践から、他校の先生方は、主体的・対話的で深い学びを実現させるためには、ＩＣＴをどのように活用したらよいのかを学んでほしい。

東方中＝☎0984・23・3613